

斎藤拙堂 「西帰下岐蘇河」 小考

内田 健太

はじめに

司馬遼太郎の長篇小説「峠」に、主人公河井継之助が備中松山の陽明学者山田方谷を訪問する旅の途中で、各地の名高い学者と面会してゆく様子がつづられている。そのなかで、伊勢安濃津の学者斎藤拙堂を訪問する場面がある。⁽¹⁾この斎藤拙堂（二七九七～一八九五。伊勢安濃津藩士。拙堂は号。名は正謙。字は有終。通称は徳蔵。号は鉄研学人・拙翁など）を、司馬遼太郎は次のごとく現代の読者に紹介する。

ここにはぜひあいさつせねばならぬ大事なお人がいる。継之助の恩師の斎藤拙堂であった。

海内屈指の学者である。

拙堂は、代々の藤堂藩士である。ただし大垣藩の小原鉄心のような藩の名門の出ではなく、足軽程度の藩士の家に生まれ、学問をもって累進し、いまではこの大藩で家老に準ずる待遇をうけている。

幕府による最高の学府である江戸湯島の昌平黌にまなび、さらに古賀精里の門下に入った。精里は継之助の師匠の謹一郎の祖父である。二十四歳で津に帰り、藩校の教授になった。

若いころ京都にあそび、当時詩名を天下にうたわれていた頼山陽をたずねた。山陽は最初小僧あつかいをしていたが、拙堂がさしだした文章をみておどろき、

「先生」

とよび、下座から上へ移し、友人に対する礼をとった。これを同席していた同藩の士がみて目をみはり、このときから拙堂の

名が一時に重くなった。

その後四十年、藩の学務と政務につき、その業績は天下に高い。とくに経済に長じ、藩財政を一新した。

拙堂は、江戸のころの門人としては、

「第一に河井継之助」

として高く評価していた。もっとも学問の弟子としての評価というより、継之助という人間の不可思議さを愛していたらしい⁽²⁾。

この「海内屈指の学者」と再会を果たし、師弟が久闊を叙する場面のおとに、次のようなくだりがある。いささか長くなるが、現代における齋藤拙堂理解の一つを窺わせるものとして示したい。

——学校は、経理を基礎とする。

というのが、拙堂の考え方であった。いかに学校を整備したところで、それを維持してゆく財政基盤がなければならぬ、ということであった。

(さすがは、拙堂先生だ)

と、継之助はその点に感心した。この藤堂藩の学校は、たとえ出版などもする。とくに資治通鑑を出版し、これが天下の読書人にどれだけ利益したかわからないが、すべてこの学校の経済力がそれをさせた。

また学校は、武術道場も併設している。なかでも西洋砲術の

部門に力を入れ、その研究生を多く江戸に留学させていたが、その経費も藩予算から出ず、学校から支出されていた。

学校は、種痘館ももっている。拙堂は幼少のころ天然痘をわずらったためにこの病気に強い関心をもっていた。すでに天保十二年(一八四一)に江戸の蘭医が牛痘接種による予防技術を導入したが、世間は理解せず、ほとんどひろまらなかった。その費用も、すべて学校から支出された。この学校の経済力をその一事でも察することができるであろう。

(さすがである)

と、継之助はいよいよ感心した。しかし多少の不満がなくもない。

——偉大ではあるが、治世の能吏である。

ということであった。

天下国家が安定しているときにこそ、拙堂の能力は大いにかがやくであろう。しかし天下国家が崩れようとするときには、拙堂ならばどうするであろうか。

(隠退しかあるない)

と、継之助はおもう。継之助の前途にある時代相は、拙堂の生きた時代のように平和ではありえない。乱世である。拙堂は乱世の雄にはなりえないであろう。

拙堂の欠点は、そこであった。拙堂の文章なども小品はきわめていいが、

——大手筆ではない。

と、継之助はおもっている。一世の運命を予言し、天下のゆくべき方向を指さししめすような予言者としての壮大な頭脳ではなく、その能力と思考範囲はあくまで藤堂藩三十二万二千石にかぎられていた。能吏である。それも過去の能吏である、とおもわざるをえない。

（拙堂先生は学者であり能吏であるが、おしむらくは思想がない。思想がないため、将来を予言することはできぬ）

それが、拙堂への不満であった。その不満を、あるいは備中松山の山田方谷はうずめてくれるであろうか。

このように司馬遼太郎はその麗筆で齋藤拙堂の人物器量を描く。このくだりは、作中の河井継之助が語る形をとりながら、著者司馬遼太郎の齋藤拙堂評価が表明されているものといえる。その像を端的に示すものが、

——偉大ではあるが、治世の能吏である。

という一句である。この一句は、後漢末の曹操に対する月旦評「治世の能臣、乱世の奸雄」〔『三国志』「魏書」巻一「武帝紀第一」斐松之注引〕を踏まえたものとみられるが、文武に卓越した「非常

の人」曹操を引き合いに出すことによって、「拙堂は乱世の雄にはなりえない」ことを暗に示すものと思われる。その上で、作中の河井継之助をして、「拙堂先生は学者であり能吏であるが、おしむらくは思想がない。思想がないため、将来を予言することはできぬ」と、「恩師」への「不満」を語らしめている。このことは後に、河井継之助が陽明学者山田方谷のもとを訪問し、「天下の英雄方谷先生に及ぶものなし」と評したことと対応するものとみられる。

その「思想」のゆえに、長岡藩に壮烈な悲劇を招いた河井継之助を題材として、司馬遼太郎は、「峠」に先立ち、「英雄児」と題する短篇小説を著し、その結末を次の言葉で結ぶ。

英雄というのは、時と置きどころを天が誤ると、天災のような害をすることがあるらしい。^③

司馬遼太郎のいう「思想」のありようについてはひとまず措くとしても、^④この齋藤拙堂については、これまでの研究史においても、まずはその「学者」としての在り方、「能吏」としての業績が注目されてきた。^⑤

さらに、齋藤拙堂を語るにあたって、逸することができないのがその「文章」である。日本・中国の歴代の文を博搜し、その優れた見識によって評論した彼の『拙堂文話』『続文話』は、当時から定評のある書物である。そして、「梅谿遊記」「月瀬記勝」「下岐蘇川

「記」などの山水遊記は、齋藤拙堂の文名を大いに高めた。これらの「小品」、とりわけ「下岐蘇川記」（『拙堂文集』巻二）は、戦前の中学校漢文教科書に「殆んどといってよい位に採録」されていたことにより、^⑤同時代から戦前に至るまで広く愛読されてきた。

本稿は、その「下岐蘇川記」と一對となる詩「西帰下岐蘇河」を取り上げて検討することにした。 「下岐蘇川記」については、漢文教材として親しまれてきた経緯もあって、幅広く鑑賞され、多くの教材研究や行われてきたが、この「西帰下岐蘇河」詩については、その享受のありようをうかがうと、北尾墨香編『撰東七家詩鈔』（一八四九年刊、いま汲古書院『詞華集日本漢詩』所収）、兪樾編『東瀛詩選』（一八八三年刊、いま、佐野正巳編による汲古書院刊、一九八一年）、塚本哲三編『新撰名家詩集』（有朋堂書店刊、一九二三年）など、同時代から戦前にかけての日本漢詩詞華集に採られるにとどまるのみで、戦後の日本漢詩研究を先導した山岸徳平、猪口篤志各氏による代表的な日本漢詩選集には収められていない。^⑥ 齋藤拙堂の詩のおよそ千二百首のうち、二百一十首に本格的な注解を施した画期的な著作である、杉野茂『齋藤拙堂詩選』（三重県良書出版会、一九九二年）や、それに先立って発表された杉野氏の労作『勢海拾玉集 江戸後期伊勢の詩人と詩』（収録された詩人数は六十五名、詩数は二百十首、うち齋藤拙堂詩は六首。光書房、一九八二

年）にも収めるところとならず、この「西帰下岐蘇河」詩は、いわば「下岐蘇川記」の陰にかくれた存在となっている。しかしながら、この「西帰下岐蘇河」詩は、齋藤拙堂の人と文学を考える上で興味深い問題をはらんでいると考える。以下、この「西帰下岐蘇河」詩を材料として、「偉大ではあるが、治世の能吏である」と評される齋藤拙堂の知られざる一面を明らかにしてみたい。

なお、本稿を草するにあたり、テキストは、三重県立図書館蔵、齋藤正和編『拙堂詩集』（私家版 一九九〇年）作品番号〇三三四「西帰下岐蘇河」（0137頁〜0138頁）を底本として、呉鴻春輯校『鉄研齋詩存』（汲古書院刊、二〇〇一年）巻四（『祇役集』三、八五頁）と対照し、あわせて詞華集採録のものを参看した。

一

「西帰下岐蘇河」詩は、木曾川下りを題材とした五言古詩である。その木曾川下りを行うに至ったいきさつについては、「下岐蘇川記」に詳しい。右のように「岐蘇」と「キノ」を表記することについて、大室幹雄『月瀬幻影——日本近代風景批評史』は、次のようにいう。上古以来、氏名と同じく地名にも漢字が当てられてきたが、詩文に詠みいれるとなると、それが長すぎたり、無意味だったり、

何よりも雅馴を欠いているのを詩人たちはきらった。で、名字と通称のほかに唐人風の名や字や号をいくつかこしらえたのと同じ作法で、地名も漢土風に変えて使った。^①

「キノ」は、木曾のほか、岐曾、岐蘇、吉祖、岐岨とも表記されるが、「キノは木の国」のイメージと、木曾義仲を代表とする清和源氏の本曾氏の勃興から、「木曾」の表記が一般化したものらしい。

平凡社『日本歴史地名大系』によれば、「木曾」のことが文献に現れてくるのは、八世紀の初めて『続日本紀』大宝二年（七〇二）の条に「十二月壬寅、始開美濃国岐蘇山道」とあるのが最初である」という。「岐蘇」の語はこの『続日本紀』に基づくものとみられる。さて、「下岐蘇川記」は、次のように始まっている。

天保丁酉四月、余 役を竣へて、両藩士と俱に江戸より還る。路を東山に取り、輿を捨てて歩行し、旁ら名勝を探る。

「天保丁酉」は、天保八年（一八三七）、時に斎藤拙堂は四十一歳である。^②四月、「役を竣へ」、「役」とは、「祇役」ともいい、参勤交代する藩侯に従って藩士が江戸へ出ることをいう。定例の江戸勤番を終えた斎藤拙堂は、ふたりの藩士と江戸から伊勢安濃津へと帰還するのにあたり、通常の東海道経由ではなく、東山道経由を試みる。駕籠を使わず、歩行することで、帰郷という「業務」の道すら、東山道の名勝を実見探訪しようとしたのである。こうした「ず

いぶん窮屈だったろうと想像される諸侯藩士の出張旅行でも、状況次第では、遊興の旅になりえた」江戸士人の旅のあり方について、大室氏前掲書では、次のように論じている。

庶民ではなく士人の身分に属する人たちの遊興の旅における目的が「山水の勝跡を探る」こと、すなわち風景の発見と欣賞にあると、小竹および彼の読者らがほぼ自明のこととして考えていたことが知られる。風景愛好は彼らの教養の主要な一部門であったから、業務を離れた、自発の旅もその教養から無縁におこなわれるはずもなく、いつも何がしかの精神主義を携えながら彼らは旅を楽しんだ。さきに彼らの遊興の旅を武者修行型と呼んだ理由である。^③

斎藤拙堂のこの旅は、まさにその好例といえよう。そして、斎藤拙堂の東山道の旅は、信濃を経て美濃へと入ってゆく。

五月四日、十三嶺を下り、晩に伏見駅に宿す。連日崎嶇として、山間に経渉し、頗る疲る。奴輩の槍を把り鎧を荷ふ者に至りては、或いは瘡痛して起つこと能はず。且つ水路の勝を聞くこと熟せり。因りて舟を賃して岐蘇川を下らんことを謀る。桑名に至るまで殆ど二十里、一日ならずして達すといふ。乃ち舟人を召して之を戒む。

「十三嶺」は、美濃国土岐郡（現在の恵那市から瑞浪市あたりま

で)の急坂の総称。「伏見駅」は、東山道六十九次の五十番目の宿場。美濃国可児郡、現在の御嵩町にある。「崎嶇」は、潘岳の「西征賦」にみえ、山道のけわしいさま。「瘡痛」は、「詩経」「卷耳」に出る言葉で、病みつかれるさま、疲れ果てるさま。四十一歳の齋藤拙堂が、「崎嶇」たる山道をもとめせず、あちこち「山間」を遍歴して「頗る疲る」という描写に、大室氏の「武者修行型」という評言が、別な実感とともに迫ってくる。一方で、おそらく「名勝」に興味がないであろう「奴輩の槍を把り鎧を荷ふ者」が、疲れ果てて立つこともできなくなるまで、その「精神主義」につきあわされていることにも、「武者修行」にひそむ滑稽と悲惨が感じられるようである。事ここに及んでなお、「且つ水路の勝を聞くこと熟せり」という齋藤拙堂の言葉をみると、疲れ果てた「奴輩」を思いやるその〈優しさ〉はそれとして、「風景の発見と欣賞」にかける「武者修行」の凄みを思わずにはいられない。

かくて、齋藤拙堂は、木曾川の舟着き場であった伏見から、伊勢桑名までのおよそ八十キロメートルを一日で到達するという舟旅を企図し、船頭を呼び出して出発を命じたのである。次節では、「西帰下岐蘇河」詩について、二句ごとに検討を加えていきたい。

1 峽雷殷地起 峽雷地に殷として起こり

2 客子皆驚魄 客子皆魄を驚かす

「峽雷」の語は辞書にはみえないが、杜甫「白帝」に、「高江急峡雷霆闘」とあるのを意識したものか。長江の峡谷になぞらえ、山峡に雷のような轟音がわきおこるさま。「殷地起」は、杜甫「秦州雜詩二十首」其三に、「秋聽殷地發、風散入雲悲」とある。「客子」は、家郷を離れてさすらう旅人、旅客のこと。「驚魄」は、びっくりさせられること。孟郊「上昭城閣不得於從僧悟空院嘆嗟」に、「手把驚魄、脚踏堅魂」とある。なお、吳鴻春編輯『鉄研齋詩存』では、「驚魄」を「驚魂」に作るが、齋藤正和編『拙堂詩集』に従う。

3 篙師理舟楫 篙師舟楫を理め

4 進与波濤敵 進みて波濤と敵す

「篙師」は、船頭、水夫。「篙」は、舟を進めるための棹で、「理舟楫」は、舟のかじをさばくこと。この句は、杜甫「水会渡」に、「篙師暗理楫、歌笑輕波瀾」とあるのを踏まえたもの。「波濤」は、ここでは急流の激しい波のこと。杜甫「最能行」に、「欵帆側柁入波濤、撇漩捎漬無險阻」とある。

5 波間石齒齒 波間石は齒齒

6 廉利類劍戟 廉利劍戟に類す

「波間」は、なみま。韓愈「叉魚招張功曹」に、「刃下那能脱、波間或自跳」とある。「石齒齒」は、多くの石のかどのならぶさま。

韓愈「柳州羅池廟碑」に、「桂樹团团兮白石齒齒」とあるのを踏まえる。「廉利」は、かどだって、よくきれるさま。川の石が剣戟のように鋭いことをうたうこの句は、韓愈「送区冊序」に、「江流悍急、横波之石、廉利侔劍戟」とあるのを踏まえたものであろう。

7 舟行雖云險 舟行險と云ふと雖も
8 亦喜多所得 亦た喜び 得る所多し

「舟行」は、舟旅。杜甫「夔州歌十絶句」其七に、「萬斛之舟行若風」とある。「舟行雖云險」は、いわゆる逆接の確定条件の形で、「舟旅は、危険ではあるにしても」の意。杜甫「五盤」に、「五盤雖云險、山色佳有餘」とある。ここでは、齋藤拙堂が「舟行」の「險」に、風景の「佳」ではなく、心象の「喜」を対比していることに注意したい。

9 倒樹掛危巖 倒樹 危巖に掛かり
10 飛泉下絶壁 飛泉 絶壁に下る

「倒樹」は、倒れた木のこと。王維「燕子龕禪師」に、「橋因倒樹架、柵值垂藤縛」とある。「危巖」は、めずらしい形の巖石。高く取り巻くように競い立つ巖石。『漢語大詞典』は、高攀龍の「三時記」を用例として挙げる。「飛泉」は、『漢語大詞典』に、『楚辞』

「遠遊」にみえる谷の名、噴泉、瀑布とあるが、ここでは瀑布を指す。¹⁴⁾

11 奇哉山水趣 奇なるかな 山水の趣
12 黄王留真迹 黄王 真迹を留む

「奇」は、一言で言えば、「奇妙超凡的趣味」¹⁵⁾ではあるが、現代語の「奇妙」よりもさらに陰影に富んだ用語である。ここでは韓愈を始めとする中唐期の文人たちが、「規範からの逸脱」「逸脱への志向」という意識のもと、「奇」という批評用語を標榜したことに注意したい。¹⁶⁾

「山水」は、自然界の景物を指す言葉であるが、南朝宋代から、当時の思想界の風気とともに、自然美への認識を語る象徴的な鍵言葉として用いられてきた。¹⁷⁾ 一方で、江戸後期の文人たちの「山水癖」について、大室氏前掲書はこう指摘する。「教養人たちの風景愛好は彼らのあいだで「山水癖」と、それにまたより少ない頻度で「烟霞癖」と呼ばれた。語の由来はいうまでもなく唐土にあって、その引喩的な借用だった¹⁸⁾。こうした風気のなか、自ら「余平生烟霞の癖あり」（『客枕夢游録』）と述べる齋藤拙堂の山水観について、直井文子「齋藤拙堂の詩と紀行文」は、次のように論じている。「拙堂は、山水の観は人の志気を奮い立たせ、心胸をすがすがしく開かせるもの、そして文道に、ひいては儒教の「道を行う」ことに

大いに役立つ、と考えたのである¹⁹⁾。

「黃王留真迹」は、杜甫「戲題画山水図歌」に「王宰始肯留真跡」とあるのを踏まえる。「黃王」は、中国元代、新たな山水画様式を開き、「元末四大家」と呼ばれた文人画家、黄公望（江蘇省常熟の人。字は子久。号は一峯・大痴）と王蒙（浙江省呉興の人。字は叔明。号は香光居士・黄鶴山樵）を指す。「真迹」は、本物の筆蹟、真筆。このことについては後述するが、あたかも、「自然が藝術を模倣する」かのような境位を述べたものであろうか。なお、「下岐蘇川記」では、この消息について、「荆・関の筆、倪・黄の手に非ずんば、状すること能はざるなり。僕隸の輩の山水の趣を解せざる者と雖も、皆連りに奇と呼び声を絶たず」という。つまり、この景觀は、「荆・関・倪・黄」（「荆・関」は、五代梁の山水画家荆浩・関同を指し、「倪・黄」は、元末四大家のうち倪瓚と黄公望とを指す）の手筆でなければ描くことができないというわけで、この詩の意図するところは微妙に異なる。

13 予本好奇者 予本とより奇を好む者にして

14 性命甘一擲 性命 一擲に甘んず

まず、「予本とより」ということに関して参考になるのは、右の直井氏論文である。直井氏は、「拙堂自身、山水の遊覧をもともと好んでいた」と指摘し、「遊長谷山記」（文政七年、齋藤拙堂二十八

歳の作）を次のように引く。「西遷するに及び、端坐すること終日、日々筆硯を事とす。公事を除くの外、未だ肯へて門を出でず。家君、其の宴安、疾を生ずるを慮り、屢々行游を諭す。余、素より此の癖有り。乃ち、山水の遊ぶべき者を謀り、近き従りして始む²⁰⁾」。

齋藤拙堂がその「本とより」のものであるとする「好奇者」とは、奇異のことを好む者、好事家、ものずきのことではあるが、「奇」が、上述のように、「規範からの逸脱」「逸脱への志向」を主軸とした批評用語であること、そして、彼が、儒者として、勸懲論的文学観、道徳論的文学観を奉ずる立場にあったとされることに留意したい²¹⁾。

「性命」は、中国思想史で古代から盛んに議論された言葉であるが、ここでは、「天より賦与せられた人間の本性」という定義を²²⁾その理解の基軸として挙げておく。その思想的背景を考慮した上で、ここでの「性命」は、「生命」あるいは「命」という意味²³⁾でとらえたい。「一擲」は、ひとたび投げうつつ。双六の骰などを投げること。所有しているものを一度に投げ出すこと。この「性命甘一擲」は、「奇」のためなら、生命——「天より賦与せられた人間の本性」——すら、一度に投げ出してもかまわない、と理解できるものだと考えられる。このこともまた、後述するように、齋藤拙堂の通説的な理解からするとたいへん興味深いものである。

15 警如兒說鬼 警へば兒に鬼を説けば

16 一怖且一楽 一たび怖れ且つ一たび楽しむがごとし

「譬如」は、「警へばごとし」。この二句は、この「奇」がもたらす感興をたとえるならば、小兒に亡霊の話をしてやると、一方できゃあきゃあと怖がり、一方できゃっきゃっ喜ぶようなものだということを読む。前述の通り、「山水」への情熱ということでは、その歴史的事情から、自然愛好の貴族的な文化の基底にある思想的風気に関わるもの、江戸後期の文人墨客にとっては漢文古典の教養を前提としてたしなむ清雅なるものといえるだろうが、斎藤拙堂は、これをたわいない幽霊譚になぞらえている点がおもしろい。

17 出險奇亦尽 険より出でなば奇も亦た尽き

18 悵然意相惜 悵然として意相ひ惜しむ

「出險」は、ひとたび険難な地から出でしまったならば。木曾川下りで難所とされる尾張犬山まで下りきってしまうと、あとは広闊で緩やかな流れとなり、奇趣もなくなってしまうことをいう。なお、「下岐蘇川記」では、さらに下流の河港笠松で昼食をとり、再び舟に戻ってからの様子について、「岸愈々闊く、水愈々緩し。險阻已に遠ざかり、復た観るべきもの無し。枕藉して臥す。風方逆にして、舟人力を用ゐ、搦搦として甚だ勞す。櫓声喧聒、人をして煩冤せしむ。午下、稍々風の便を得て、帆を揚げて復た走る。衆乃ち睡熟す」

と、はなはだ退屈そうに述べている。ちなみに、現代の「日本ライオン下り」も、美濃太田から犬山橋下までの約十三キロメートルの区間となっている。

「悵然」は、がっかりして、うらめしげなさま。宋玉「神女賦」〔文選〕卷十九にいう。楚襄王が宋玉と長江流域の雲夢の浦に遊んだ際、宋玉に「高唐賦」を語らせた。すると、その夜、夢の中で美女と邂逅することができたが、神女は夢ともにあえかに消えてしまった。この体験について宋玉が「状甚奇異。寐而夢之、寤不自識。罔兮不樂、悵然失志」と語ったことを踏まえる。

19 忽思垂堂言 忽ち思ふ 垂堂の言

20 此遊豈可數 此の遊 豈に數なるべけんや

「忽思」は、いまふと思う。「垂堂言」は、『史記』卷百一「袁盎晁錯列伝」に、「千金の富裕な家の子は座敷の端に坐らない。百金の富裕な家の子は馬車の横木にもたれない。英明な君主は偶然の幸運を頼みにして危険を冒しはしない」とあるのを踏まえる。「座敷の端」すなわち「垂堂」については、「屋根から瓦が落ちてきたり、地面へ転がり落ちたりする危険、横木は、すべて倒れる危険があり、富家の子はそんな場合も自分の身を危険にさらさぬよう用心する、の意」とある。

「此遊」は、この木曾川下りの行旅のこと。「豈可數」の「數」

は入声で「サク」⁽²⁷⁾。

この最後の二句は、「下岐蘇川記」の結びの文と対応するものである。その文にいう。

蓋し天下の至奇至美なる者は、毎に艱難危険の地に在り。独り山水の勝のみならざるなり。之を求むる者は、虎穴に入り、竜額を探るに比す。危くして後に獲る所有り。余是に於て感有り。未だ以て千金の子に語るべからざるなり。姑く之を記して、以て苦学励行の人に示す。⁽²⁸⁾

この文の趣意について、戦前の漢文教授資料は「危険を冒して後、始めて奇勝を獲べき所以を叙し、教訓の意を寓す」と説く。⁽²⁹⁾ 自ら「苦学力行」を積んで立身した斎藤拙堂ならではの訓戒の重みが伝わる。「下岐蘇川記」に比べると、「西帰下岐蘇河」詩のこの結びは、同じ『史記』の典故を用いつつも、「千金の子」ならぬ身ならばこそ、このたびは木曾川下りの「奇」を満喫できた、いまふと、かの「垂堂の言」を思い出して苦笑い、という諧謔味が感じられるように思われる。

以上で、「西帰下岐蘇河」詩の検討をひとまず終えたい。筆者は、以上の検討から、三つの論点が抽出できると考える。

- 「西帰下岐蘇河」詩が典故として踏まえたものの特質
- 「西帰下岐蘇河」詩にみられる「奇」への志向

○「西帰下岐蘇河」詩と「下岐蘇川記」との離合

このうち、「西帰下岐蘇河」詩と「下岐蘇川記」との離合の問題については、紙幅の都合により別の機会に譲り、次節では、上記の二つの論点に絞って鄙見を述べることにしたい。

三

まず、「西帰下岐蘇河」詩が典故として踏まえたものの特質について述べたい。この「西帰下岐蘇河」詩は、前節に検討したように、その景観を詠じる詩料として、杜甫そして韓愈の作品を典故として頻繁に用いている。この杜甫と韓愈とは、盛唐詩と唐宋古文とを重んじる折衷的詩文論、載道の器としてのはたらきを尊重する道徳的文学観の立場に立つ文章家斎藤拙堂が宗とする典範であった。⁽³⁰⁾ この杜甫そして韓愈による主に長江を舞台とした作品群、長江の舟行を歌う詩の引用を積み重ねてゆくことで、目に映る木曾川の景観と、唐土の山水風景世界とが二重写しになってゆく。この舟旅の終盤、川下りの危険が去り、景観の「奇」が尽きると、「悵然」——がっかりしてうらめしげになって、あの危険がもたらした「奇」を痛惜していることも、雲夢の浦に遊んだその夜、「夢」に「神女」と遇うものの、「夢」とともに消えてしまい「悵然」となる「神女賦」

と、同じ構造にあるといえよう。

江戸後期に生きた斎藤拙堂は、黄公望や王蒙の描いた山水画の題材となった唐土の景観を実見することはかなわなかった。しかし、彼の詩眼はこの木曾川の景観に、「黄・王」の「真迹」を見いだした。すなわち、黄公望や王蒙の描いた山水画の風景を風景鑑賞の準拠として、木曾川の景観美を享受したのである。いわば、木曾川を長江に見立て、さらにその景観を、彼が文学的典範とする杜甫そして韓愈の文学言語の引用によって表現することによって、現実の木曾川を、「岐蘇河」として詠じているのである。

大室幹雄『月瀬幻影——日本近代風景批評史』は、斎藤拙堂の山水遊記「梅谿遊記」を例として、彼を始めとする江戸後期文人の風景鑑賞の芯に、「江戸シノワズリの詩学、唐土の古典文学にかかわる教養の暗示引用つまり引喩の修辞学」があると論じ、さらに斎藤拙堂が菰野水沢村の楓林を描いた「山房観楓記」を、杜牧「山行」詩と比較考量して次のように指摘する。

彼の風景欣賞のこういうやりかたは、歴然と江戸シノワズリの引用暗示による引喩的な視線であった。いわば拙堂は肉眼にかえて、肉眼のまえに、遠眼鏡ならぬ唐眼鏡をかけることによつて風景を見た。⁽³²⁾

この「西帰下岐蘇河」詩もまた、杜甫そして韓愈の文学言語を

「レンズ」とする典型的な引喩的作品として位置づけることが可能であろう。教養に裏打ちされた趣味のよい「レンズ」を細心に選び抜き景観を丹念に形象化してゆく。そこに「能吏」としての拙堂の像を重ね合わせることもできるかもしれない。

しかし、この「西帰下岐蘇河」詩は、もうひとつの「レンズ」がある。

それが、「西帰下岐蘇河」詩にみられる「奇」への志向である。前節でみたように、11「奇なるかな山水の趣」、13「予本とより奇を好む者にして」、17「險より出でなば奇も亦た尽き」と、奇数句ごとに「奇」の字が現れている。この「奇」への志向は何を意味するのか。

ひとつは、先にみた杜甫そして韓愈が、その文学において「奇」すなわち「規範からの逸脱」「逸脱への志向」を打ち出したことが関与しているものとみられる。もうひとつ、このことも関わるが、「江戸シノワズリの山水癖には奇巖怪石を珍重する風があって、頼山陽の耶馬溪発見や安積良斎による妙義山紹介も、一にそれらの場所に林立する特異な形状の巖石が偏愛されたのによる」と論じられるように、「奇」や「癖」、「趣」や「霊」、そして「真」や「狂」という用語で象徴される中国明末の思想観念の流行と連動するものであると考えられる。こうした風気は、明末の師心派詩学に影響され

たいわゆる江戸清新派文学観に立つ詩人たちのみならず、美しい景観を「奇勝」とか「奇絶」とか表現するような形で、江戸後期の文人たちに広く通有されていた。³⁶ 斎藤拙堂は、明代の学古派詩学にも、あるいは師心派詩学にも、どちらか一方の門戸の見にとらわれず、盛唐詩と唐宋古文とを基盤としつつ新たな基軸を打ち出そうとする折衷派詩文論の立場に立っていたが、木曾川の景観に「奇」を見いだし、その「奇」によって「岐蘇河」の風景を点綴してゆく彼の「引喩の修辞学」の射程には、こうした用語も収められていたとみることがができる。

ただし、この詩の「奇」をめぐることは、そのような「レンズ」として論じ去れない側面がある。斎藤拙堂は、この詩で、7「舟行險と云ふと雖も」8「亦た喜び得る所多し」と詠じている。前節で検討したように、この句は、杜甫「五盤」の、「五盤は険と云ふと雖も、山色の佳餘り有り」を踏まえる。斎藤拙堂は、この句を引用暗示しつつ、舟旅は、危険ではあるにしても、その心に得る喜びは大きい、と詠じて、舟旅の危険に、風景の「佳」ではなく、心象の「喜」を対比している。また、17「険より出でなば奇も亦た尽き」18「悵然として意相ひ惜しむ」と、川下りの難所をすぎてしまえば、奇趣もなくなってしまう、がっかりだと詠嘆する。

こうした心象のよりどころとして語られるのが、13「予本とよ

り奇を好む者にして」14「性命一擲に甘んず」の句である。この言表そのものは、明末の師心派詩学を受容した当時の文人のものとしてはありふれたクリシェといえるかもしれない。しかし、江戸後期の文人たちが意識していたであろう明末の小品文に照らしてみると、斎藤拙堂の「レンズ」の向こうが見えてくるように思われる。

観る者 以て性命と衡すと為すも、殊に謂ふ無し。而して余顧みて之を樂しむ。(袁宏道「由捨身巖至文殊獅子巖記」³⁷)

棟方徳「袁中郎の山水観——北京在任期以降の遊記を中心に」は、袁宏道の後期山水遊記の特色について、「険しい山水の中を経巡るのは、ただの命知らずの危険な行為ではなく、彼にとって、実は快樂に通じるものである」と指摘し、

「危険」と「快樂」という一見相反するかのように見えるものが同一視されるということは、彼の遊記の特に隱棲期および再出仕期の大きな特色と言えよう。彼のように、「危険」と「快樂」を同時に描いた作者は彼以前にもそして彼以後にも現われなことはなかった。ここにも彼の特異な作風が窺える。³⁸

と論じる。この「危険」と「快樂」とを同時に描くことの「特異」さこそ、「西帰下岐蘇河」詩の特質にほかならない。この「危険」と「快樂」とが隣り合わせとなることから生じる「特異」な感興は、近代の言葉で言えば、「快(プレジューア)苦(ペイン)ともに鋭く

拙堂のかくれた一面がここにある。

おわりに

大室氏は、斎藤拙堂の「思想」について次のように論ずる。

拙堂の思想に即すれば、唯一最良の教養たる読書がまず人の心にはその根柢としてあるべきであり、読書の教養に培われていくことによって、心は世界と心との調和を養い育てて、世界のおおらかな全称肯定たる穆如の懐にいたるのである。ここに本来は審美的な趣味にすぎない山水癖の自然もしくは風景愛好の心情が、読書の教養によって一個の穆如たる心に成長して、そのとき風景の楽しさと美しさを十全に享受できる精神が形成されるとする風景観照の哲学を看取することができる。^⑭

ここで説かれる「穆如の懐」とは、「よろこび、やすらぎ、なごやかさ、むつまじさ、おおらかさ、つつしみなど、人と世界の関係を平安な充実に導く心の動静の総体」であると大室氏は説明する。

大室氏の卓見が示すように、斎藤拙堂の風景鑑賞の核心には、確かにこうした「哲学」があったであろう。しかしながら、ほかならぬ大室氏が、

すなわち彼らはやはり引喩的な暗示引用の論理と心情によって

急激な感動をあたえること」すなわち「スリル」ということになろう。^⑬ 15 「譬へば兎に鬼を説けば」 16 「一たび怖れ且つ一たび楽しむがごとし」と、小児に亡霊の話をしてやると、一方で怖がり、一方で喜ぶようなものであるという比喻も、この「スリル」を説くものだとみなせる。つまり、木曾川の景観の「奇」を、教養に基づく「レンズ」によって、優しく楽しく眺めるといふ文人墨客の風景鑑賞の作法から逸脱し、現実の木曾川の激流が直にもたらす感興を兎戯の「スリル」のレベルになぞらえて説いているのである。

では、こうした発想は何に導かれたものなのか。斎藤拙堂が、唐宋のみならず、明清の詩文に至るまで丹念に読み込んでいたことは、その『拙堂文話』『続文話』に徴して明らかで、この袁宏道の山水遊記についても、『続文話』巻一でふれている。^⑭ 一方、文章家斎藤拙堂は、袁宏道を代表とする明末師心派詩学がいたずらに「奇僻」に傾斜したことを鋭く批判する。^⑮ 他方、その斎藤拙堂が、儒者として勸懲論的文学観・道德論的文学観を奉ずる彼が、この木曾川下りを体感して、「危険」と「快樂」とは隣り合わせだという発想に共鳴し、「性命一擲に甘んず」と、「険」が「奇」をもたらすのであれば、生命すら、一度に投げ出してもかまわない、と謳う。この小論のはじめにみた「能吏」として、「穏かな儒学者で教授、藩吏として堅実な経世家、社交上手な教養人」として評される斎藤

中国古典を愛読し、漢文で散文を書き、詩を作っていたけれど、それらにちりばめられた引喩と引用にもかかわらず、総体として、彼らの作品において、彼らの生と現実がほかならぬ引喩と引用を圧して溢れ出ているのである。ということは、彼らの生に先行することは、同じことだが、彼らの生の現実に優先しているはずであった文学（中国古典）を凌駕して、彼らの歴史的な生の現実が表現の前面にすっきりと形姿を現わしていたという⁽⁴⁾ことである。

と喝破するように、斎藤拙堂の「生の現実」が、端なくもこの「西帰下岐蘇河」詩から浮かび上がってきているのである。泡だち、しぶきたつ木曾川の激流がもたらしたこの「危険」と「快楽」の感覚には、斎藤拙堂がこの木曾川下りで体験した生々しい一回性の現実が顔をのぞかせているように思われる。

斎藤拙堂の「西帰下岐蘇河」詩は、有名な「下岐蘇河川記」の陰にかくれた作品である。杜甫そして韓愈の文学言語を「レンズ」として、木曾川の景観を長江の風景になぞらえた「岐蘇河」として詠じ、また、その「奇」への志向をもう一方の「レンズ」として、奇絶なる「岐蘇河」の風景を享受する。しかし、その美しく磨かれた「レンズ」のむこうに、木曾川の激流がもたらす「スリル」に興じる斎

藤拙堂の姿がみてとれる。この詩は、穏和で堅実な学者であり「能吏」とされる斎藤拙堂のかくれた一面をあらわにしたものであるといえよう。

注

(1) この旅の描写は、河井継之助の西方遊学日記『塵壺』（安藤英男校注、平凡社・東洋文庫、一九七四年）に基づく。その記述によれば、河井継之助が伊勢安濃津を訪れたのは、安政六年（一八五九年）六月二十一日から二十三日にかけてのこと。

(2) 司馬遼太郎「峠」〔司馬遼太郎全集 第十九巻〕所収、文藝春秋、一九七二年）

(3) 司馬遼太郎「英雄児」〔司馬遼太郎全集 第三十一巻〕所収、文藝春秋、一九七四年）

(4) 河井継之助をめぐる「思想」の問題については、吉田公平「河井継之助と陽明学——司馬遼太郎『峠』にことよせて——」〔『東洋学研究』第四十四号、二〇〇七年〕に詳しい。司馬遼太郎の「思想」に対する思考については、司馬遼太郎「宋学」「朱子学的作用」〔『この国のかたち』司馬遼太郎全集 第六十六巻〕所収、二〇〇〇年）等にも見える。その司馬遼太郎の思想

理解については、木下鉄矢『朱子（はたらき）と（つとめ）の哲学』（岩波書店、二〇〇九年）参照。

- (5) 斎藤拙堂の人物を論述したものとしては、桜木幹雄「斎藤拙堂の人と業績」(三重県高等学校国語科研究会『会報』第二十四号、一九七六年)、橋本栄治『斎藤拙堂・土井聳牙』(叢書日本思想家 三十九 明徳出版社、一九九三年)、斎藤正和『斎藤拙堂伝』(三重県良書出版会、一九九三年)などがある。

- (6) 橋本栄治『斎藤拙堂・土井聳牙』に拠る。また、斎藤正和『斎藤拙堂伝』参照。

- (7) 加藤国安「明治人の清代古文(二)——卓然トシテ衆ニ顯ハレシコトヲ期ス——」(『東洋古典学研究』第三十一集、二〇〇一年)参照。中学漢文教科書におけるいわゆる「日本漢文」の取り扱いに関わるものとしては、小金澤豊「近代教育における漢文教科書教材の変遷」(『二松学舎大学人文論叢』第七十三輯、二〇〇四年)を参照。

(8) 斎藤拙堂の詩が各種詞華集にどのように採録されているかについては、直井文子「斎藤拙堂の詩と紀行文」(『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第十四号、一九九一年)参照。直井氏の論考は、斎藤拙堂の紀行文全十八種を解題し、詩と紀行文との相互照応と、それぞれの特質を論じたもので、「西帰下岐蘇

河」詩を考察の対象とする本稿の主題とも関わる。直井氏は、「西帰下岐蘇河」詩と一対になる「下岐蘇川記」について、¹²⁾下岐蘇川記 天保八年。四十一歳。同右(『拙堂文集』巻二)所収。江戸勤番からの帰途、藩士二人と、伏見から舟で木曾川を下ったことを記す。五月四日・五日で一日の記述が長い。『近世名家文鈔』等に採録。「西帰下岐蘇溪」の詩が『祇役集二』所収。」という。なお、本稿では、『拙堂詩集』に基づき「西帰下岐蘇河」と表記することとする。

- (9) 大室幹雄『月瀬幻影——日本近代風景批評史』第六章 江戸シノワズリの風景作法(中央公論新社、二〇〇二年)

- (10) 直井文子「斎藤拙堂年譜稿」『お茶の水女子大学人文科学紀要』(第四十一巻、一九八八年)に拠る。

- (11) 大室氏前掲書、「第五章 山水癖と殺風景」

- (12) 「彼らが旅に寄せた一種の精神主義を堅苦しいものに思う必要はまるでない。旅の主目標である山水の風景そのものが、彼らの風景を渴望している眼には美しく、優しく、好ましいものとして、いわばロマンチックに映っていたからだ。むろん風景はそういうものだとは彼らは聞いたことがあった。即ち教養があったからである」(大室氏前掲書、「第五章 山水癖と殺風景」)
- (13) 安沙而上、則山益高峻、皆危巖絶壁、斬然両開、中瀉碧流。

(14) この場面の風景描写は、「下岐蘇川記」では、次のようになっている。「山皆石身にして土を戴き、松之が髪と為りて、紅

杜鵑 其の間に粧点し、猩血 滴るがごとし。又处处に水簾有りて懸かる。綏綏灑灑として潭石の上に墜る。石は皆奇状にして、兩岸に羅列せり。或いは特立して柱のごとく、或いは拆裂して門のごとく、或いは渴驥の澗に飲むのごとく、或いは臥牛の道に横たはるのごとし。五色陸離として相間はる。皴は率ね大小の斧劈を作り、間々荷葉・披麻を作す者有り。波浪に濯はれて以て出で、交替去来して応接に暇あらず」。右の傍点箇所が「飛泉」の描写とらしい。

(15) 成復旺主編『中国美学範疇辞典』「奇趣」(中国人民大学出版社、一九九五年)

(16) 川合康三「奇——中唐における文学言語の規範の逸脱」(東北大学『文学部研究年報』第三十号、一九八〇年。いま『終南山の変容——中唐文学論集』所収、研文出版、一九九九年)

(17) 小尾郊一『中国文学に現れた自然と自然観——中世文学を中心として——』(岩波書店、一九六二年)。また、大室幹雄『桃源の夢想——古代中国の反劇場都市』(三省堂、一九八四年)、赤井益久『中国山水詩の景観』(新公論社、二〇一〇年)を参

照。

(18) 大室幹雄『月瀬幻影——日本近代風景批評史』(第五章 山水癖と殺風景)

(19) 直井文子「斎藤拙堂の詩と紀行文」(『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第十四号、一九九一年)

(20) 同右。

(21) 中村幸彦「近世儒者の文学観」『岩波講座 日本文学史 第七卷 近世Ⅰ 第6分冊』(一九五八年。いま『中村幸彦著述集』第一巻所収、中央公論社、一九八二年)、松下忠『江戸時代の詩風詩論——明・清の詩論とその撰取』(明治書院、一九六九年)

(22) 森三樹三郎『上古より漢代に至る性命観の展開』(創文社、一九七一年)

(23) 三浦國雄『伊川擊壤集の世界』(『東方学報京都』第四十七冊、一九七四年)。「性命」概念の歴史的な展開については、溝口雄三・丸山松幸・池田知久編『中国思想文化辞典』(東京大学出版会、二〇〇一年)を参照。

(24) 棟方徳「袁中郎の山水観——北京在任期以降の遊記を中心に」(『二松学舎大学人文論叢』第五十二輯、一九九四年)。また、棟方氏はこの論文で、「好事者」について、「余世上の語言に

味無く、面目憎むべきの人を観るに、皆癖無きの人なるのみ。

若し真に癖する所有らば、将に沈湎酣溺して、性命死生之を以てせんとす。何の暇ありて錢媽宦賈の事に及ばんや。古の花癖

を負ふ者、人一の異花を談ずるを聞かば、深谷峻嶺と雖も、蹶躓して之に従ふを憚らず。濃寒盛暑に至り、皮膚皴鱗、汚垢

泥のごとくなるも、皆知らざる所なり。是れを之れ真に花を愛すと謂ひ、是れを之れ真に事を好むと謂ふなり」(袁宏道

「瓶史」十「好事」という袁宏道の発言を検討している。
(25) 兪樾『東瀛詩選』など各種詞華集では、「一怖且一樂」を

「一怖且一悦」に作る。
(26) 小川環樹・今鷹真・福島吉彦訳『史記列伝』第三卷、岩波文庫、一九七五年、163頁および177頁。

(27) 「豈可数」は、典型的には「豈に数ふべけんや」(どうして数えられようか・どうして責められようか)と訓読するかと思

われるが、この「西帰下岐蘇河」の押韻をみると、この「数」は入声である(平水韻「疏渥切」。その場合、「数」は、「たび

たび・しばしば」、「速」と通じて、「速い」「せわしい。せつつかれるさま」(広韻「所角切」、あるいは「細密なさま」(集韻

「趨玉切」という方向からの解釈(右の語釈は、濱口富士雄・佐藤進編『漢辞海 第三版』(三省堂、二〇一一年)による)

が予想されるが、はっきりしない。一方、兪樾『東瀛詩選』な

ど、各種詞華集では、この最後の句は「此倅豈可竊」(此の倅豈に竊むべけんや)に改めている。すると、「この倅倅は、ど

うしてかすめとるべきものであろうか」となり、「下岐蘇川記」の訓戒の線に近くなる。あるいは「此の遊豈に数なるべきか」

と詠嘆で捉え、しばしば「垂堂の言」が脳裏によぎることを指すものかとも思われるが、いまは「此の遊豈に数なるべけんや」と訓んで、「この旅のさなかには、ひとたびも脳裏に浮か

ばなかった」の方向で解しておく。
(28) 蓋天下之至奇至美者、每在於艱難危險之地。不独山水之勝也。求之者、比入虎穴、探竜嶺。危而後有所獲矣。余於是乎有感。未可以語千金之子也。姑記之、以示苦学励行之人。

(29) 明治書院編『新修漢文 教授資料』巻四(第二版) 明治書院、一九三二年。

(30) 松下氏前掲書参照。斎藤拙堂の韓愈景仰に関しては、直井文子「斎藤拙堂における韓愈——『拙堂文話』をめぐって——」

『お茶の水女子大学中国文学会報』第七号、一九八八年)に詳しい。

(31) 大室氏前掲書、「第三章 月瀬幻影」

(32) 大室氏前掲書、「第五章 山水癖と殺風景」

(33) もっとも、好奇の「奇」は「渠羈切」（「勤移切」）、奇数の「奇」は「居宜切」（「古漪切」）で音を異にする。

(34) 川合氏前掲書、第1篇「中唐の文学」

(35) 大室氏前掲書、「第七章 表緑菜黄の景観と風景の自娛」

(36) 明末におけるこうした観念の思想文化史的意義については、入矢義高『明代詩文』（筑摩書房、一九七九年。いま井上進補注『増補 明代詩文』として、平凡社・東洋文庫、二〇〇七年）、内山知也『明代文人論』（木耳社、一九八六年）を参照。江戸後期の文人の「明風の受容」については、中野三敏『十八世紀の江戸文芸——雅と俗の成熟——』（岩波書店、一九九九年）に詳しい。斎藤拙堂の「狂」を論究し、「江戸の文人」としての側面を指摘したものに、直井文子「斎藤拙堂と「狂」」（『東京成徳大学人文学部研究紀要』第十五号、二〇〇八年）がある。

(37) 観者以為与性命衡、殊無謂。而余顧樂之。（『袁宏道集箋校』卷三十七）

(38) 袁宏道の「快樂」については、中村嘉弘「袁中郎小論——快樂と自適について——」（『Walpurgis』79）に專論がある。また、棟方氏にはこの論文の姉妹篇として「袁中郎の遊記について」（『二松』第七集、一九九三年）があり、北魏酈道元の『水經注』から明末の小品文に至るまでの「遊記」の系譜を概観し、

袁宏道の山水遊記の文学的特質を論じている。

(39) 江戸川乱歩「スリルの説」（『新版 探偵小説の「謎」』所収、社会思想社・現代教養文庫、一九九九年）

(40) 斎藤拙堂が取り上げているのは、第十四条で「開先寺至黃巖寺觀瀑記」（『袁宏道集箋校』卷三十七）、第十六条で「文漪堂嶺至三峽澗記」（『袁宏道集箋校』卷三十七）ならびに「開先寺至黃巖寺觀瀑記」。注(37)の「由捨身巖至文殊獅子巖記」と、この「由天池踰含嶠嶺至三峽澗記」と「開先寺至黃巖寺觀瀑記」とは、万曆二十八年（一六〇〇年）に著され、書物の上で連続した篇である。江戸期における袁宏道詩学の受容については、内田「学古」と「師心」の間——袁宏道研究の現状と課題——（『東洋古典学研究』第十三集、二〇〇三年）参照。ちなみに、王水照・呉鴻春（呉鴻春訳、高克勤校点）『日本文学者中国文章学論著選』（上海古籍出版社、一九九四年）は、『統文話』卷一の第十四条および第三十二条において、「遊廬山記」の句に、《遊廬山記》と標点符号を施す。

(41) 『拙堂文話』卷一、第四十四条。徐渭の「奇癖」が、師心派詩学を誤らせたことを論じる。

(42) 「拙堂は中国の史書を、彼の藩の事業として、『資治通鑑』

を上梓することを推進したほどに、読んだけれど、他のほとんどすべての漢学者同様に政治と道徳の訓戒としか理解しなかったから、陶淵明を引用しながら、この田園詩人の作品と生活の形式そのものが、強烈な反都市の衝動と反文明の情意につらぬかれていたことにまったく関知しなかった。加えて彼は仏教信者でも老荘信奉者でもなく、まして神秘主義者ではなかった。

穏和な儒学者で教授、藩吏として堅実な経世家、社交上手な教養人であった」(大室氏前掲書、「第七章 麦緑菜黄の景観と風景の自娛」)

(43) 大室氏前掲書、「第七章 麦緑菜黄の景観と風景の自娛」

(44) 大室氏前掲書、「第十章 新しい知識人たちの風景」